ソ連当局者否定

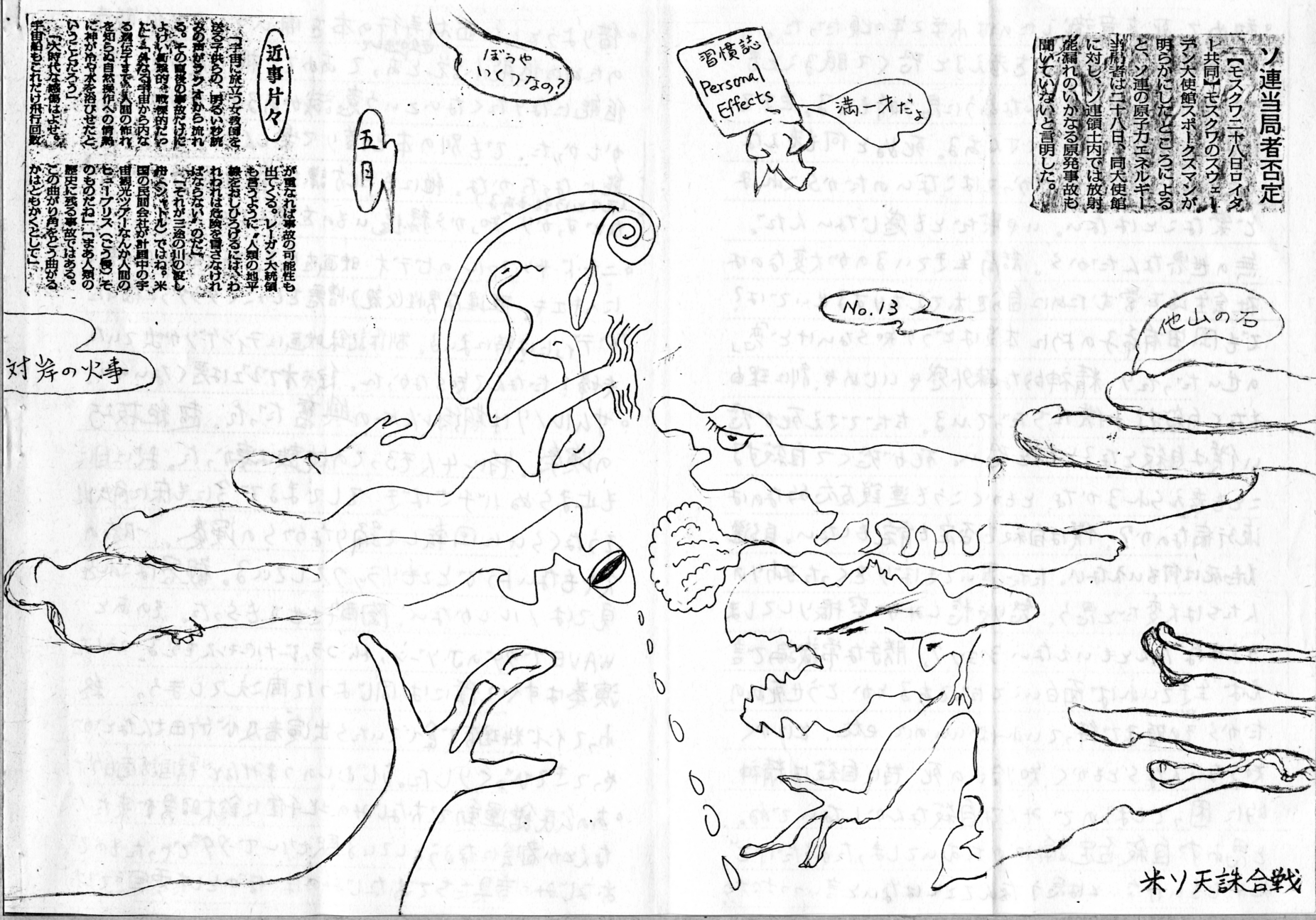
【モスクワ二十八日ロイター共同】モスクワのスヴェーデン大使館スポークスマンが明らかにしたところによると、ソ連の原子力エネルギー当局者は二十八日、同大使館に対し、ソ連領土内では放射能漏れのいかなる原発事故も聞いていないと言明した。

近事片々

「宇宙に旅立つ女教師を送る子供らの、明るい歌声の声がラジオから流れる。その直後の事故だけによけい劇的。悲壮的だ」と。然なる宇宙から内なる素粒子まで、人間の怖れを知らぬ自然操作への警鐘に神が冷や水を浴びせたと、いうことだろう」

「大時代な感傷はよせ。宇宙船もこれだけ飛行回数が重なれば事故の可能性も出てくる。レーガン大統領も言うように〝人類の地平線をおしひろげるには、われわれは危険を冒さなければならない〟のだ」

「それが三浦の山の寒し舟〈ヘッセ・ドル〉ではね。米国の民間会社が計画中の宇宙観光ツアーなんか人間のセコ・プリス（こう慢）そのものだね」「まあ人類の歴史に残る事故ではある。この曲がり角をどう曲がるかはともかくとして」



米ソ天誅合戦

。初めて死を意識したのは小学2年の頃だった。自分が消えてしまうことを考えると恐くて眠ることもできなかった。今でもそんなふうに思う時もある。生きているといやなことはたくさんある。死ぬと何も考えなくていいし何もふりかかってはこないのだからこれほど楽なことはない。いや楽だとも感じないんだ。無の世界なんだから。結局生きているのが大変なのは社会生活を営むために自分をおさえたりするせいでは？でも岡田有希子のように本当はどうか知らないけど「恋」のせいだったり精神的な疎外感やいじめや、別に理由もなく自殺する子供たちだっている。ただでさえ死が恐い僕は自殺となるともっと恐い。死が恐くて自殺することも考えられるかな。ともかくこうも連鎖反応的なのは流行病なのか？。僕は自殺を否定も肯定もしない。自選んだ死は何もいえない。ただ置いてきぼりをくったまわりの人たちは大変だと思う。怒りや悲しみが空振りしてしまうようななんともいえないショック。勝手な常識論で言えば生きていれば面白いことだってあるとかどう世死ぬのだからその時まで待っていればいいのにetc.とにかく知らない人ならともかく、知り合いの死、特に自殺は精神的に困ってしまうのでみんな自殺なんかしないでね。と思わず自殺否定論にかたむいてしまったようだけど必ずしないけないとは思うなんてことはないと言いつつオタオタ。

。借りようとした西村寿行の本を開いてみると低能者のための低能小説（子供が主人公で）とあってあわてて棚に戻した。まだ低能になりたくないという意識があることがわかっておかしかった。でも別の本を借りて楽しんだ。やっぱり低能になったかな。他にも北方謙三、南野征典、J.ヒギンズ（元々という話もあるが）などすっかり「知」から縁遠いものを読んでいる。

。ニキ・ド・サンファルのビデオ・映画を見る。その上映時間の長さにヘキエキ。陰湿な男性（父親）憎悪をしつこくダラダラと描いた「ダディ」には特にまいる。制作記録映画にティンゲリが出ていた。夫婦？だなんて知らなかった。絵やオブジェは悪くないのに。

。サムルノリは期待以上の興奮だった。超絶技巧の演奏。特に4人そろっての杖鼓は凄かった。まさに目にも止まらぬバチさばき。そしてまるで今にも床に触れそうなくらいに回転して踊りながらの演奏。一瞬のスキもないようでとてもリックスしている。観客はこれを見てはノルしかない。陶酔させてもらった。そのあとWAVEでタダのJ.ゾーン、トム・コラ、ジーナパーキンスを見る。こうした演奏はすべて僕には同じように聞こえてしまう。終わってインド料理店で食べていたら出演者及び竹田さんなどがやってきてびっくりした。うじむしのつまみなど韓国話面白かった。

。あの公民館運動でおなじみの北千住に鈴木昭男が来た！なんとか都会になろうとしている駅ビルでタダでやったものでおなじみの音具たちでおなじみのほのぼのとした雰囲気でした

No. 3468M, VA: Divorced male in forties, interested in corsets, exotic lingerie, nylons, boots, leather, bondage. I am AC/DC plus TV, love French and Greek arts. Seek female dominant and submissive, age and race no barrier. Only female interested in above need apply. Marriage possible. See Photo.

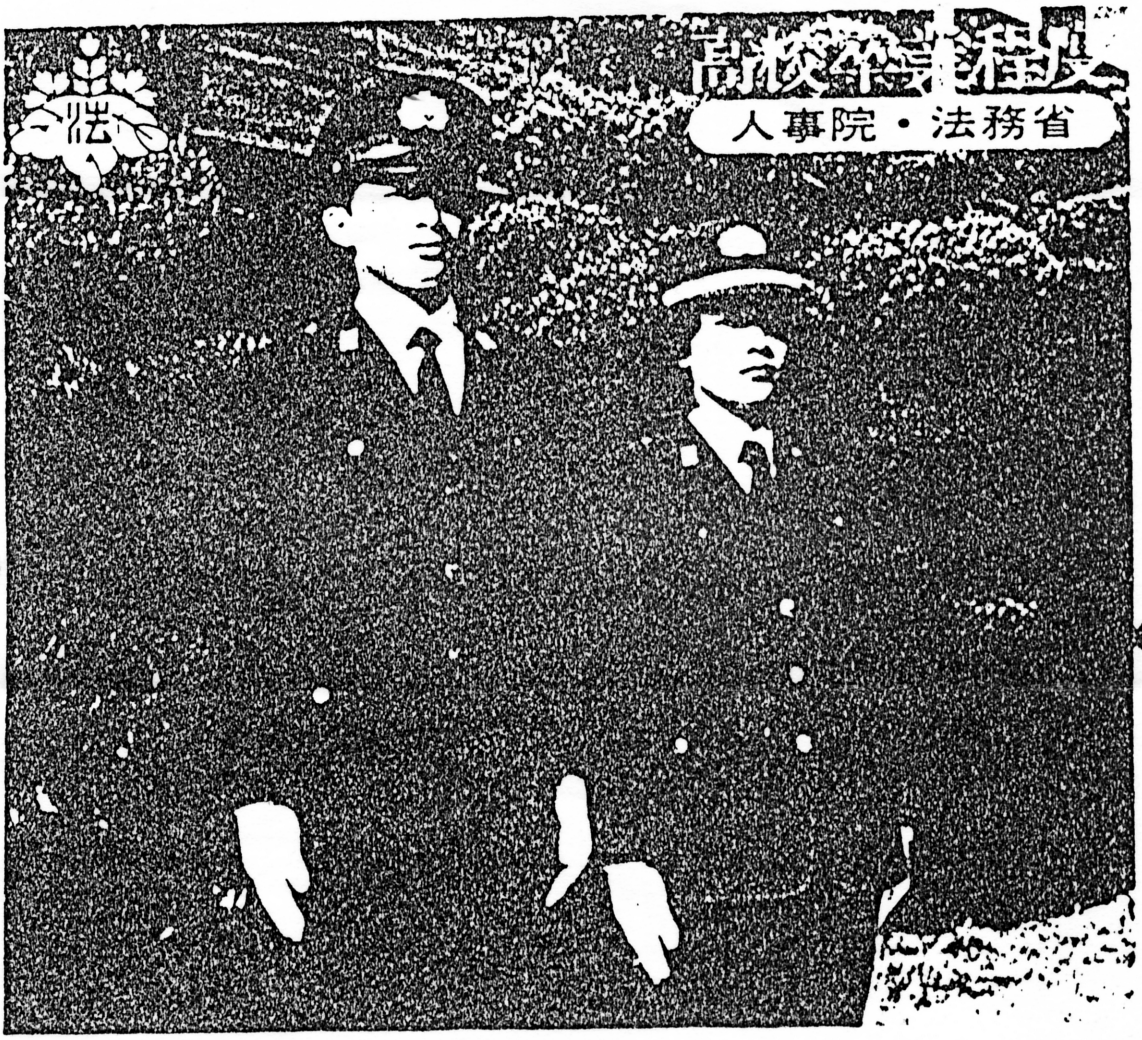
BEIRUT — CHATILLA CAMP

昭和60年度

刑務官募集

高校卒業程度

人事院・法務省



受付期間 8月23日(金)▷9月5日(木)

第1次試験 実施日 10月13日(日)
試験地 男子・52箇所 女子・4箇所

受験資格 昭31年4月2日～昭43年4月1日生まれの者

●問い合わせはあて先明記の返信用封筒を同封のこと

問い合わせ先 〒124 葛飾区小岩 1-36-1
東京拘置所 庶務課 03-690-6681

(投稿)

「テープ評 "PERSONAL SOUND EFFECTS No.4" (内輪へ向けて)

Personal Sound Effects (以下PSEと略す)もVolume 4となるとそろそろ質的な傾向が定まってくるのではないかと思われるが、どうして仲々そうもいかない。編集者であるGESOは『月刊カセット』のやり方に影響をうけたという心情を吐露していたことがあるが、実は「ホイシャー」の如き同様のイベントを「才五列」も計画していたのだ。今をさること数年前に、「才五列」は2本のテープを同時に出発させた。各々にはGESOとONNYKのオリジナル・トラックがA面のあたまから入っていた。彼等はそれらが互いに信頼できる知人の各々のトラックを得ながら次々と渡り、いつかは帰ってくることを願っていたが、これはあまりにも善意に頼りすぎた計画であった。今になってもそれらは帰ってこない。『月刊カセット』が世に出た時は惜しかったのは当然であろう。しかしいかんせん『月刊カセット』は特定のサークルの中を行き来しているにすぎない。より不特定多数の、より様々な方向性を得ようとするのは「才五列」創始者らの性癖である。(5C-00を、福袋を、売国心(「なまこじなしこおせえ」)を見よ。) GESOはここで大きな変換を許した。それは必ずしも参加作品が自作でなくてもよいという事である。これは音・音楽〜聴覚におけるオープン指向であるといって良いだろう。もしこれが許されないならミュージックコンクレートは、スクラッチは、サンプリングは、いわゆる引用は許されない。かくして、バルトーク、ハンス・ライヘル、その他の懐かしくも楽しい音群を我々は得た。著作権? なるほどそういうものもあった。しかし我々は鼻唄を口笛を行うにあたって、それを考慮するだろうか? はたして「PSE」は公的なものなのか? (プラトンは三人よれば国家ができるといった。大阪の坂口氏曰く「メイルネットワークはコミューンの変形みたいな感じ」。) そうだ、「うたかたの日々」ならぬ「日々のうたかた」、いや「思考のうたかた」として生じる筈のPEやPSEに準ずる公的な配慮は不要なのだ。公という名の拘制が、我々の普段の言動をいかにつまらぬものにしているか。肝腎の内容について触れる必要もあるのだろうか? テープの内容よりも、ここではすべて各自の試行錯誤の有様をいかに互いに面白がれるかが重要だ。」

<誌評>

「汀」Vol.8『起源と痕跡』—民族音楽学批判（大塚正著）

思考の、いや試行のうたかたとしての彷徨変異も、ゆらぎや「アッビ」（機械や大工仕事における）として私は好きだが（そればっかりやっているともいえるが）、こうした緻密な作業を目のあたりにすると成程、説得力の強度というものがあるとすればこうした正攻法こそがそれを産み出す限られた方法なのかと思わざるを得ない。まず過去の様々な「規範」の中から分析と抽出により批判の対象を明確にし、ソシュール、吉本（興業ではない方の）、ルロワ・グーラン、カネッティらの概念を援用しながらそれらの対象を徐々に追い込み、一方で「身体性」ともいえる図式を提示することによって「音楽」以系の「音楽」の姿をとらえようとする。彼の言葉ではそれが「痕跡の世界」である。そして、それ以後の問題についてはすでにバックナンバーにおいて若干触れられているし、またギャップを埋めるために（ミッシング・リンク？）今後の論の展開を可能にする余地を自ら示しているのである。化学における微量な物質の検出において、量的には殆んど数値を示さないが、その物質が存在した証拠を得た時「痕跡」という表現を用いるらしいが、正しく、その意味において「音楽」の「痕跡」的な存在状況を推定していくこの試み（まこと）は定性分析的過程ということができよう。しかし、一方で痕跡とは過去に存在したある事実、ある現象の名残り、余波、影響といった二次的な意味あいを私に強要する。ここで彼の視線は、アタマに示されている図にある如く、現状での「音楽」という半定型化された位置から遡行し、遂には音楽が、音楽として定量化され得ない地点まで、時の流れを逆行させてみているのであることに注意したい。我々はここで彼の論の流れに従って読み進むことによって「音楽」の概念の名残りは、未来ではなく始源にあることを、（あるいは始源こそが「音楽」の暴力的な拘束をあまんじて受けていることを）確認するのである。それは彼が論中「〈喩（たとえ）〉の特能」と呼んでいることなのだが、詳細は読んでいただくのが良い。（「起源とは実は痕跡であったのだ」この矛盾的な興奮。）

さて、ここで論の初めにある次の文章を読んでみよう。「〈音楽の普遍性〉という幻想を見出だし、西欧世界で崩壊しつつある音楽とそれを支える観念形態をその極限までおしすすめることを回避し、そのような幻想の中で逆に崩壊しつつある理念を忘却し、忘却を糧うことで救出しようとする意図が『民族音楽学』の奥底で働いているといえるだろう。」そして、彼は次の段で「音楽の起源の考察が重要なテーマとなってくること」を述べはじめる。通常、我々が「民族音楽（学）」に対して抱く、一種のあこがれと、うさんくささの同居状態、つまりは、我々をとりまく「音楽（的）状況」への諦念とひそかな希望を彼はこうして却下する。民族音楽という言葉は「民族」と「音楽」という二つの語によって保護された仮説的な事象であったのだろうか？民族音楽を理解するとはその様式の数々を心情的にあるいは分析的に納得して棚上げにすることにすぎなかったのか？もはや我々は「民族音楽」を聴くことはない。

NO.

DATE

お葬式体験記

母方の祖父が亡くなったのは4月16日の午前0時を20分過ぎたときだった。母の実家は岐阜県の恵那郡という、あの中津川の近くの山村で、知らせを受けて姉と共に通夜の席にいそいだ。駅まで出向かえに来てくれた従兄弟の車で、なんでも明治だか大正天皇だかが泊ったことがあるという村の本家であるところの大邸宅に到着。着替えればよいと思っていつもの服装をしていたら、「ジーパンがやぶれている。」「見すぼらしい」と母になじられた。さっそく死者と対面。入院中の衰弱がひどく、生前の面影は無い。耳や鼻へのつめもが変になまなましい。手首が合掌の姿に縛ってある。首が横を向いたまま硬直してしまったのを、母は気にしているようだが、死体をあちこちいじるのは良くないことのように思った。全体が「く」の字に曲って横を向いているため入柩時に苦労したらしい。通夜を済ませた後は酒宴が始まるのだが、普通に飲んでいたら「渉は酒が強いなァ」などと言われ、しきりに飲まされた。酔った。「線香の火を絶やさないように」と言っておきながら、おじさん連中はそのまま寝てしまい、一人で起きているハメになった。多少は死者への哀悼の気持ちはあったが、柩の中の死体を観察することができた。

翌日は早朝から火葬場へ出かけるのだが、昨夜の酒が強く残っている。ウイ〜。柩は孫が運ぶらしい。思ったよりも全然軽い。こちらではほとんど土葬が主流なのだが、着先の陽気のため火葬することにしたらしい。しかし葬儀は土葬のスタイルで行なうため、葬式の前に焼いてしまうのだった。

やはり火葬の場面が今回圧巻だった。強い焼けた灰の臭いの中で、形を保ったままの白骨が姿を現わすと、いっせいに泣きはじめる親族一同。おっと、思わずつられるところだったぜ。骨拾いもダイナミック。土葬のため骨つぼも大きめとあって、大腿骨なんかそのままゴトンと収められる。[redacted]なかなか、お経の大合唱が始まるとシャーマニックであった。焼きあがるのに時間がかかったので、その間従兄弟たちと将来の話などを交わした。

午後からは大葬儀。参列者は200人を超え、[redacted]お坊さんも13人来た。故人は1900年[redacted]生まれの86歳という大往生。従軍衛生兵として中国大陸に渡り、太平洋戦争時は派遣軍人として地元の小学校に駐留。戦後は郵便局長を勤めたらしい。僕にとっての「田舎のおじいちゃん」から戦前、戦後を生きた一個人としての性格があばかれる。祭壇には故人の使用した短刀が飾られ[redacted]ていた。焼香までの間、寝不足と車酔いのために横になっていたので喪服がしわになった(笑)

埋葬。葬儀屋がいないため進行が悪い中を墓地まで大行列。石碑は無く、木柱(?)を土の上に立てるだけの、葬儀の立派さから比べると質素にも思われる簡単なもの。

あー終わった終わったぁ。それにしても親族の会話、日教組の悪口と今だ少連人をロスケと呼んでいた元中学校長にはまいった。母方の家系は、まぁどう見ても右翼チック。田舎はこわい。たぶん近いうちに祖母の葬式もあるでしょう。

4/27 "TOY-BOX 復活Gig"、C.C.Mecca、エゴン・モール、フェンクス ～～～ etc…
福本氏からもらった招待券で行ってきましたスーパー・ロフト(笑)。最後に出ると思ってたらなんと最初に出てしまっていた、カトウラ・トウラーナを見のがしてしまった。そんな訳でC.C.メッカを含めていくつかのロックバンドをぼーっと見ていたら腹が立ってきた。行くんじゃなかった。リハーサルも眠かれているかのような貧弱な音群。これはろくに才能も意志も無い連中が、単に人前でいばりちらしたい式のしろうと以下の学芸会。こんなもので商売になるのかしら。(チケットぴあを通してある)ハードコア・パンクでも見せられた方が気持ちがいいやい。主催のパフェ・レコードって富山のレーベルで地道にやってるな、という印象があったのに、「音楽的」にもまるでスカ。C.C.メッカが一番まともに見えた。今の若い人って皆こうなのかしらん?。死んじゃえバカ。

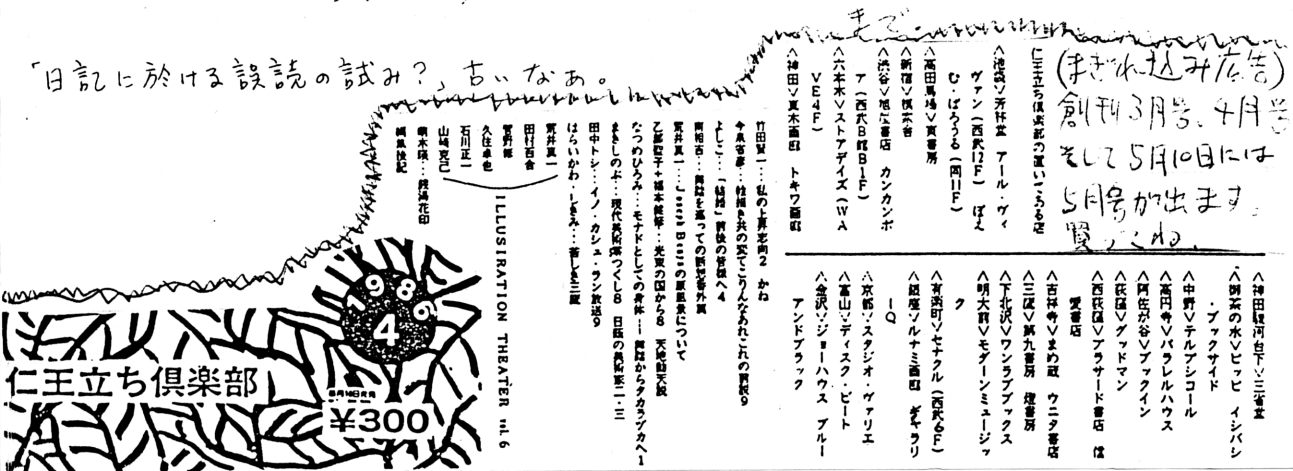
そういう訳で情ないやら腹立たしいやらで愚痴が多くなる毎日ですが、誤解(ミス・リーディング)もここまでくると手におえなくなってくるから仕末に困る。どうも最近はドゥルーズなんて読んでたのが恥ずかしくなる。一方で、信用していません。既に使い古された「パリ第8大学用語」を活字で見かけると赤面してしまう。でもまだ商売にはなるらしい。関係ねーや。どうせ死んじゃうんだもん。

告. 来たる公民館運動に向けて再び雑誌「コケイン」を刊行せんがために原稿を公募します。テーマは「日記」。正しく「Personal Effects」との重複を避けるために「日記形式であれば何(フィクション)でも可」と範囲を拡げます。サイズはB5。〆切は5月25日。完成品は実費で買ってネ。

〒157 世田谷区千歳台2-1-5 第3司荘
原 雅明 03(483)7079

〒166
杉並区高時北2-26-2
河合 渉 03(338)0990

「日記に於ける誤読の試み?」、古いなあ。



★なんたって昔から《連続手紙魔》の自称他称もあったくらいで、僕の手紙は質的には不均一ながら結構量があり回数も多い(もーつおまけに早かったりする)。PEに載る載らないは考えずに出してますが、意図的に文脈から引き剥がすような引用をされては困る場合もありますが、原則的には(全体のバランスも考えなきゃいけないでしょうし)適当に切り貼りしていいですよ〜ん、と今更のようにお断りしつつ、お元気ですか？　僕は風邪と長期戦を展開中です。咳がひどい。

★岡田有希子の飛び降り自殺にはやっぱりびっくりした。失恋したからって何も死ぬこたぁないのに、と理屈で考えても仕様がないだろうな、ホレハレは《非理》の世界なんだから。だけど、加東康一も言ってたけど、彼女のは純粋培養された仮想恋愛だったんじゃないかなって気もするし、自殺した場所にうじゃうじゃ集まり路上にキッスしたりするファンの皆様には無気味なものを感じる。……と言ってるたった今、テレビでは生前の彼女が『くちびる Network』を歌っている（フジテレビ『第6回紅白そっくり大賞』。そっくりさん番組というのも無気味だ）。僕は割とファンでしたね。最近のアイドルの中では最も「曲に恵まれていた」と思っています。特に初期、一連の竹内まりや作品がグー。

それにしても気の毒なのは、遺書の中で失恋の相手として名指された峰岸徹。深い関係がなかったにしても寝覚めが悪いだろうに……。この人はヒット作はないけど、往年の赤城圭一郎に似たマスクが印象的な役者ですね。石川セリが主演した唯一のロマンポルノ『濡れたサーキット』でセリの恋人のレーサー役を演じてたのと、(記憶違いでなければ)『日本無責任時代』で植木等にギター教えてくれとせがむ金持ちのボンボン高校生役をやってたのを思い出します。

☆高橋春男が、〈あの世にて：もう一度生き返りたい〉と自殺を後悔する岡田有希子に、泉重千代が《生き返って屋上から飛び降りようとする峰岸徹を目撃する》幻覚を見せる〉というアブナイ漫画を描いてた（えーと、確か『漫画サンデー』）。最後は泉サンが彼女を、悲しむな、どうせ皆いずれここに来るんだから、と慰めて終わる。いつもながら高橋マンガはほのぼのと残酷ですごい。

★さてクレージーの映画と言えば、僕は東宝時代の全30本中24本半を観てます（昨年再上映された松竹時代の『クレージーと七人の花嫁』を見逃したのは悔しかった）。まー、クレージー作品は同工異曲のものが多いうえに、大体はオールナイトの特集をぶっとおしで観るもんだから、頭がワヤになってどれがどれやら混乱するのですが、主要作品については、三度四度繰り返し観てるから区別がつく。

お薦めは、初期ではやはり『日本無責任時代』。それから二番煎じではあるが『日本無責任野郎』。『日本一のホラ吹き男』も良い。『香港クレージー作戦』では、演奏シーンが割と長目で、楽しめる。

中期では『日本一のゴリガン男』が面白い。結成10周年記念作『大冒険』は、ネオナチスとおぼしき組織（ヒットラーのそっくりさんも出てくる）相手に戦う、無理矢理スケールを大きくしてカネもかけた作品（特撮・円谷英二）。出来はイマイチながら、観る価値あり。

よく言われるように、経済高度成長に翳りが見え始めるとともに、クレージー作品にも影が射し始め、当初の馬鹿陽気なパワーは徐々に失われていき、末期の作品群にはそれほど笑えるものは無い。中では、緑魔子をヒロインに抜擢した『日本一の断絶男』が、佐々木守のいくぶんブラックユーモアを交えた脚本（ただし、共作）も含めて、異色の面白さ。オイルショックの年に制作され、最終作となった『日本一のショック男』は、暗かったなー。

それでもクレージー映画はみんな面白い、と言いたいのがファン心理って訳。

新潟では、しばしばTVでクレージー映画を放映しているとのことで、羨ましいよー。東京でもやってないってのにさ。

★スペルマじゃないけど、ゲロを見て「キレイ！」と叫んでたのは亜湖サンでした(にっかつ『情事の方程式』。この映画はお気に入りで、3、4回観たな。ここ5、6年再上映されてなくて残念)。僕はこの手の流動物は特に奇麗とか汚いとか感じません。むしろ味覚面（及び嗅覚面）の評価のほうを重視したい。グルメでしょ。

(でも、虹が架かれば美しいと思う。)

早見純は『これが芸術だ』をざっと立ち読みした程度でよくは知らないけど、かつてエロ劇画が異様に盛り上がった頃を思い出させる。村祖俊一、ダーティー松本、中島文雄etc.今も頑張っているのだろうか。いつきたかしは画風が変わってしまった。

★『東京漂流』が出たときには様々な毀誉褒貶が飛び交ったけれど、「牧歌的な脱体制感覚で高度資本主義のシステム化された管理社会を嘆いているベトナム反戦時代のフォークソング的進歩屋と同じ」といった一面的な酷評（吉本隆明）をもって切り捨てる論者に対しては反発を感じた記憶があります。確かに、あの本には自然主義者やマルクス主義者のダメな層にも受けてしまう要素もあったけど、藤原新也の視点はそんな単純素朴なもんじゃないと感じた。

吉本はまた「たるんだ文章」などと随分侮辱的な発言もしてたけど、自分の悪文を棚に上げて何言ってんだよこのオッサンは、と思ったものです。

だって、藤原氏の文章ってやたらうまいじゃないですか。特に比喩のセンスなんか鋭い（『みんなの文章教室』でもざっと分析してたっけね）。それも、技巧を感じさせたら臭くなってしまうようところをギリギリ免れた「巧まざる名文」の類だと思いますね（吉本は『メメント・モリ』の文章のほうは褒めている。『東京漂流』の文体と根本的な違いはないと思うのだが）。ほかに、上野千鶴子・宮迫千鶴組からの批判――「反近代主義的・抑圧的男性性だ」――なんかもあるけど、これは両者の異人として拠って立つ場所の違いが窺えて面白い。

まーともかく、『東京漂流』は'83の衝撃的な収穫の一つであった。

で、今回の『乳の海』。3年ぶりの書き下ろしという訳ですが、彼の批判者たちの視点も射程に入れた、強力な作品だと思う。叩かれるであろうことを承知で、敢えて独断的な表現を選んで挑発しているフシさえ見受けられる（蟲屍の引き倒しになるかしら）。下手したら平岡正明になってしまいそうな歌謡曲論議など、承服しかねる部分もある（ただし、松田聖子のコンサート風景の描写は、『オン・アンド・オン』誌第2号所載の朝倉喬司による戸川純コンサートの風景描写に通底するものがあり――歌手のタイプは全く対照的であるが――、興味深い。主催者側の管理のための管理と、それに大人しく従う観客という図。）けど、前作以上に刺激的な現代ニッポン批判の書ではある。文章にもますます磨きがかかった感じ。

☆『ダークサイドの憂鬱』は、『乳の海』と同じときに買った。

39歳と25歳（多分）の、一回り以上も年の離れた男女の少数派の怒りが共振し合う往復書簡集（つるつる対談の次はみるみる文通（みやさこ・ちづる＋みた・いたる）というのは強引だな）。まー、この時代に対するごくまっとうな批判の書です。宮迫サンの三田青年の生活と意見への共感度がやや過剰に思えること、三田クンの阿木譲・賛と長いレコード評にうんざりさせられることなど困った点もあるが、気分はよく伝わってくる。当然手紙文だけど、宮迫サンのほうが読者の存在を頭の片隅で考慮しつつ書いてる感じで親切（反面ヘンに説明的な部分もある――あ

らかじめ公開を予定していたせいだろな)、三田クンのは時に一人よがり。後者の読みにくさは文章を横組みにすれば解消するような気もする。

☆思うに、雑誌の「人生相談」コラムの類に悩みを寄せてくる人は、おおむね次の３つのタイプのどれかである。

その１は、自分では既に答を出している癖に（ただし、その答を抑圧し、意識下に沈めている場合もある）わざわざ相談してくる者。この人たちは、自分が出した答を回答者に「もう一押し」してもらうことを期待して相談してくる。それで決心つけよう、って訳。慎重なタイプ、と言えないこともない。彼らは、たまたま回答者が意外な回答をしたりすると、怒ったり、パニックに陥ることもある。

その２は、悩んだ末、というのではなくて、自分で考えるのが面倒臭くて、回答者に頼ってくる者。慰めてもらいたいとか、甘えたいというのが主要な狙いであり、一体何を相談したいのか、悩みは何なのか、具体的でない場合も多い。精神的に未熟な人たち。

その３は、回答者を人生のエキスパートだと思って相談してくる者。彼らはそれなりに真面目な人たちなのだが、気弱である。人生相談の回答者には権威があり、自分の考えより的確なはずだという誤謬に囚われている。悩みもたいしたものでないことが多い。

以上の３つである。……このほか、数は少ないが、ただ本に載りたいというだけで（テレビやラジオの「人生相談」の場合だったら、ただ出演したいというだけで）、悩みらしきものをでっちあげてくるという、「その２」よりも粗悪なタイプもあるようだ。

というわけで、だいたい、本気で悩んでいる人は、「人生相談」に相談を寄せたりはしないものである。

で、みるみるも尊敬する橋本治の『親子の世紀末人生相談』に収録された相談ごとも、ほとんどが上記３つのパターンのどれかに属するもので、僕が回答者だったら「そんなの、勝手にすればいいだろーが!」とか「自分で考えれば!」と思わず声を荒げて突き放してしまいそうなものばかりなのですが、橋本センセイはさすがにエライ。バカに対しても、ガキに対しても、弱虫に対しても、「己を知ることによって、自分で解決させる」ための最大限の努力を払っている（ひどい質問に対しては、本気で怒ったり、憎憎しく皮肉ったりすることで、単に突き放す以上のインパクトを与えようとしている）。人生相談というより、サイコセラピーの本として、ひさうちみちおの『福音書』（これは、橋本サンの回答パターンの一部をデフォルメしたようなスタイル。質問はスケベものに限られている）と並んで希有な面白さ。

☆呉智英の『現代マンガの全体像』がようやく出た。筆者も自負するとおり、マンガの評論としてはかつてない画期的なものであることは確実だと思う。

だが、逆に言えば、今までのマンガ評論のレベルがそれだけ低かったということでもある訳で、「マンガ評論の現状」の章で叩かれる連中は、あまりにも小物というか、お粗末ですね。本書とは関係ないけど、『現代詩手帖』のマンガ特集もつまらない論考ばかりだったなー。四方田犬彦の作家評にしても、好き嫌いを言ってるだけとはいえ、浅いなー、という感じだった。

最も興味深いのは、「表現内容のための理論」の節で、そこでは「啓蒙」とは何か、に始まり、プロレタリア芸術論がゴキブリの如くしぶとく延命しているのはなぜか、近代文芸理論が取り残したものは何か、といった問題が検討されている。

反面物足りないのは、「表現構造のための理論」の展開が、まだ端初に過ぎないかの印象を与えること。呉サンはテレビを拒否している書斎派のインテリだが、現代マンガを評論するためには、テレビの影響を頑なに忌避するのはどうかと思う（もっとも、吉本隆明みたいなテレビミーハーぶりは滑稽だし悲惨ですが）。

「現代マンガ概史」の章は、資料として手際よくまとまっている。「作家論・作品論」の章もそうだが、かなり感情を抑えて公正に書いてる感じがした。作家によっては、もっとけなしたかったり、称えたりしたかったはずである。まー、マンガに対する愛情第一、ということでこうしたんだと思います。

☆第５回公民館運動：《仁王立ち倶楽部》の田中トシ氏のレポートを読んで、やはりパフォーマー本人の心理過程には観る側からは図り知れないものがあるなーと思った。本人であっても、演じる自分を他者の目で見ない限り描写なんてできるわけないから、結局「行為の意味は常に他者のもの」ってことになる訳ね。あの日ヤタスミ氏とやったことについても同じで、僕自身は８ミリのプロジェクターをいじるのは初めてで、電源コネクターの接触が悪かったことも含めてとても面白かったのだけど、観てる側にはそんなことは分からないから、退屈だったろうと思う。意味が共有できるのは、共有できるコードを用いて共有できる記号を提示したときに限られるということになるのだろうが、そしてそのほうが伝達性という点では優れているのかも知れないが、そういうのばかりじゃつまらないですよね。

☆ここんとこ観たもの：『恐怖劇場アンバランス』から［木乃伊の恋］、［殺しのゲーム］、［仮面の墓場］の３作（３月22日ジァァ50ミニホール）。'70年代初頭のもの?物語の出来としてはいずれもいま一つであるが、最近のテレビ映画と比較して、テーマにしろキャスティングにしろ、豊かな実験精神が感じられる。スカスカの２時間ドラマよりも、１時間ものでこういう面白いテレビ映画をどんどん作ればいいのにな。／『ワイズマン・コレクション展』（４月４日ラフォーレミュージアム）。「ウォーホルからバスキアまで現代アメリカン・アートの全貌」ということですが、アイディアにもモチーフにも殆ど感銘を受けるところがなかった。「アート」に縁遠い自分を感じる。／『ジャックス復活祭』（４月５日スタジオ200）。「今更気恥ずかしくて……」ってんで行きそびれた人（大里氏とかね）も相当いたと思われ、会場に見知った顔は無かった。僕は往年のジャックスは当然好きだったけど、それほど思い入れはなかったんで、別に恥ずかしがらずに行けた。原将人の16ミリ映画『自己表出史、早川義夫編』('69年という時代の雰囲気を感じるこ

とができる点以外に、特に見るところはない）の上映、ジャックスの未発表録音の紹介（これは貴重だ、確かに）をはさみながら、当時を知る遠藤賢司と森雪之丞を招いての座談会、という構成。遠藤、森氏の記憶よりも、司会の高護氏(『定本ジャックス』の編者）の説明のほうが詳しく、正確だったりする。マニアってすごいなう、と思う。／『ATGメモリアル・デー(創立記念日)特別イベント』。最初は大林宣彦・手塚真・今関あきよしというメンツでシンポジウム（司会：大久保賢一）。僕はこのうち大林作品しか観たことがないが、３人の指向性はかなり理解できた。最近は芝居の演出も手懸け、TV時代劇にも挑戦するなど、ドラマへの指向をより強めつつある今関（もともと監督というよりカメラマン的資質の持ち主であり、機械に対する愛着が強かったが、それゆえ敢えてもう公の８ミリ作品は撮らないことにしたと言う）。監督という意識は希薄で、あくまで観る人（評論家ではない)の立場に自分を置きたいという手塚。その両者の振幅の間で作品を撮り分けているという大林（『廃市』を16ミリで撮ったのは、焦点深度等の機械的性格も含めて、それが特定少数の読者を対象としている福永文学の映像化にふさわしいと判断したからだ、とか、８ミリは基本的に「歩く映画」だ、云々と、いかにも割と理に落ちた説明をしていた。この人ももともと監督というより技術家なのであった)。僕には、「作品そのものよりも、観客の反応や捕らえ方のほうに興味がある」、「メディアの種類にはこだわらない」、「今撮りつつあるのは、２人で観て、それぞれにとってまったく別の物語が成立するような映画です」云々という手塚の発言に、父・手塚治虫に共通する「教師の知性」（呉智英の表現）を感じて、興味深いものがあった。……シンポの後は、約100本に及ぶATG映画の予告編大会。僕の観たことがある作品は、このうち20本にも満たなかったと思うが、ATGには良くも悪くも青臭い映画が多いんだなー、という印象。桃井かおり、原田芳雄、石橋蓮司など、同じ役者がやたら出演しているのには、俳優層の薄さも想起されて少々辟易する。『薔薇の葬列』、『書を捨てよ町へ出よう』等には、おっ、ナツカシー、と思ったり、へー、'60年代にはベルイマン映画を結構紹介してたんだな、とか、『お葬式』の予告編の軽さは、わざとらしくて厭味だな、etc. 未見の中では『人魚伝説』と『台風クラブ』を観てみたいと思った。

☆風邪がこじれて気管支炎になってしまいました。カラ咳が出る。左の胸がじくじくと痛む。煙草吸う気も起きない。トホホ。

☆《月刊まねき猫》では、投稿者の多くが自己紹介や近況報告を書いてるのに、『い』のお題にこだわって旧作を出してしまい、浮いちゃったかなー、と少し後悔に似たものを感じています(感じなくてもいいんだろうけど……)。特に意識しなくても、僕の内部には、どうしてもＰＥに書く内容とはダブらないように／傾向を変えるように、という意図が生じてしまうようだ。バランス感覚の一種らしい。

☆あー、今回も希薄なものを長々と書いてしまった。この調子だと、いくらでも続いてしまうんで、この辺で一応ストップします。繰り返しますが、適当に独断的にカット・アンド・ペイストしていただいて結構ですからね。

19860423

日記帖「怒りの只点」　中矢誠

０月×日　支援連支援？のミーティングで熊井さんの発言。「（コンサートのような）音楽を求めて来る人たちと手を結びたいのか？」私は、狭義にその通りなので、困ってしまう。

０月×日　ウルトラマン・シリーズと同じように、殺すこと（怪獣）があたりまえになると迫力（現実味）を失うなあ、と久しぶりに必殺を見て思う。

０月×日　感覚を信じる。それは論理になって人と自分の直しるべとなる。抽象は後からやって来るものだと言うこと。頭のいい人はそれをすぐ忘れる。私は理想によって生きようと思わない。ただ選択肢についてより慎重でありたいと思うだけだ。

０月×日　ブルース・リーの「怒れよドラゴン」（？島に行って妹の復讐をする話）に、割ったビールビンで襲いかかる男を殺してしまうシーンがある。あの時の反省いじみた表情がいい、とバイト先の友だちに言ったら、それを真似して見せてくれた。学校で先生に指された時、あるいはお店でレジを打った後、先生（お客さん）にあの顔をしたら…と考えて大笑いしてしまった。

０月×日　そう言えば最近、大竹まことに大笑いして、アパートの人に恥ずかしい。彼をとても他人とは思えない。たけしのように頭もよくないし、さんまのように機転も利かない。でも、それが私にはしっくりくる。

０月×日　山口小夜子さんにレッテルを貼ると、ナショナリストの性倒錯者。これは私の最高のほめ言葉。でも素顔はびっくりするほど女の子なのですね。

０月×日　「ポリタン」は長編ギャグ漫画の最高峰と思うのだけど（あれはラストがいい）、そのとり・みき氏が、カダフィ・ファン（顔のこと）と平凡パン４に書いてて笑ってしまった。それが多分、ノーマルな感性というものだよ。

０月×日　これもバイト先での話。搬入業者が、横向き３度喰らって、１時間も遅れて来た。うんざりした顔で「商売あがったりだよ」と言う。ところで、ロケット事件を起こした戦旗派に、警視総監賞やったらどうだろう。今やマスコミは完全に官憲の味方だ。おめでたいにも程がある。もっとも、彼らもこうなることを内心望んでいるんだろうが。

０月×日　倉地さんのバンドのお手伝い。これは映画用のバンドで、倉地さんが主演する。多重録音になれていると、バンドの良さを引き出しにくい。映画の方は、（台本を見る限り）良いものがあると思うけど、経済状態に応じた作り方があるという事が分ってないし、イメージを作って制約を考えるのは、お金持ちのすること。書かない事の表現、描かないことの描写が、アマチュアを脱するには、それが大切だ。

これからは、自分のバンド以外はなるべく手を引こうと思ってます。そんなに器の大きい人間じゃないから。「できることしかできないさ／命じられてやったことなんて／一度だってないよ」フランキー・ゴーズ・トゥ・ハリウッド。そう自信を持って言えるようになりたい。

－完－

4月の出来事　4.28 ②

・信号待ちの時、水滴が数滴ふりかかってくる。空は快適。不思議に思って首をめぐらすと、道路脇のマンションの2階のベランダで奥さんが赤ちゃんのおしめを絞っている。そのとばっちり。そんなことにも、冗談じゃあないよと怒らず、かえって、内からふつふつと沸き上ってくるほほえみに身をゆだねてしまう、春爛漫に心も染まってしまったその日ではあった。

・マダンクッ「統一クッ」をみる。冒頭の農楽には驚愕。愕然、啞然、茫然、自失。TVではナムサダン、仮面劇など見聞きしてはいたのだけれども。テーマはいわゆる政治的なものであるけど、(分断された民族統一を願うといったあたり前のことに政治的というレッテルを貼るのもおかしいか)悲壮ぶらず、ブリがある。歌、舞踊、芝居、儀式が無理なく融合している。などと書くのも詮無いことだ。ともかくものっけからの農楽のダイナミズムに圧倒されてしまったので途中で急に巫女の扇めがけて千円札万円札しが飛び交い始めたのにも全然驚かなかったね。喜捨の歓びというわけで。下ネタもあったようで、そういえばTVで見た男寺党の人形劇では、人形がいきなり陽物をつき出して放尿し始めたっけ。観客との関係も和気あ、あいたるものだった。…今までの仮面劇が「常民感情の発露の場、精神衛生上のカタルシス」としてあるなら、下がらなかったら溜飲はどこへ向かっていたのか、ということがあるような。〔ブリ…怨恨を越えたもの。集団的シンパシー(心身が高揚される境地)に貫かれた再度の誓い、生命の再充電。個人的な感情次元(自分)を跳び越えた状態(の解放)→黄皙暎と李恢成の対談・群像4月号(辛辣)〕

(この月、この頁にかかれたような事とはとてもいえない事があった。知人の自らの死。言葉を失ってしまう。)

・「胡弓をたずねて～現代音楽における日本の伝統楽器」於スタジオ200
モンゴルの馬頭琴の上から降りてくる装飾音と、韓国の奚琴の太く低く激しいビブラート、中国の二胡の甘美なる「音のすべり台」(小杉女)ぶりがもっと聞きたい。レコード、テープ持ってる人、お知らせ下さい。「閏月棹歌」の無法な、演奏にはがっかり。オリジナルは大好きだが。胡弓は群奏には不向き?

・上記の催し物へゆく途中、王子の「名主の滝公園」に花見に立ち寄る。前方のベンチに腰かける二人の男性。その手が相方のももの上にある。人の気配を感じるや、さっとその手をひっこめる。桜盛りの中のなまめかしいシーン。二人とも普通の(都会的でない)おじさんだった。目の錯覚かもしれない。

・「恋愛は女に対する男の負けいくさ。骨抜きにされるか拒絶されるか」(ニーチェ)

・修那羅峠の石仏群をみる。破顔あり放屁あり、猫仏あり、おおらかで稚拙のあるその顔々は、朝鮮系のものと思われるが…。

・信濃デッサン館へゆく。村山槐多のこの→
ような素描と少年への恋文が印象に残る。

・「エクスカリバー」(監・J.ブアマン)をTVで見る。作りのおおざっぱさ、はしょった筋立て、類型的な展開が爆笑をさそう。(けなしているのではない)硬く輝きを放つ鎧の中の人体のもろさ、緑の自然の中の裸体の頼りなさ、の描写がエロティックで印象的。騎士物(チャンバラも)というのはエロティックなものだが。そういえば「コナン・ザ・グレート」の悪役の騎士軍団が皆長髪なのは色っぽかった。女は影薄く

・春、花の横溢、このむせかえるような生の放縦の季節に冬の心を抱いたままの私の一部は、なんとも居心地の悪いものを感じてしまう迷惑だ。貧乏人にとってメロンが凶器であるように(深沢七郎)…(殆ど嘘です)